

「はや（カフカスの）庭にいて……」

囚人は鼻歌が好きだ。単調さと退屈が続く時期にはとりわけそうだ。私の鉄格子「人生」の間に、若者か老人か、無学者か教養人かを問わず——時たま鼻歌を歌うという事のない同房者には、一度として会わなかった。しゃがれ声の人や音感に恵まれていない人であっても、監房の中では、その欲求に届いて、音に敏感な囚人仲間をひどく悩ませるものだ。シュトロープもやはり歌を口ずさんだが、調子っぱずれではなかった。彼のレパートリーの中では、「愛国的な」歌と軍隊マーチ、ワグナーのアリアが、俄然他を圧していた。静かな祭日の昼食後。シュトロープは窓ぎわの小机に

向かって舟をこぎ始めた。何か読んでいるふりをしている。両手で顔を支えている。扉がわの手の先を動かして、いかにも眠っていないことを暗示しようとしている。だが、眠っているか、眠りに近い状態にあることは明らかだ。（このような、意識の参画を制限した自律運動によるテクニクをとり入れているのは、経験を積んだ囚人のみである。）シールケと私は、看守が覗き穴から盗み見たときに、シュトロープの姿が見えなくなるようにと、監房の中を行ったり来たりしていた。

十分はども経ったろうか。休息から目覚めたシュトロープは、顔をバラ色に染めて立ち上がった。筋肉の緊張をほぐし、窓のそばで二度、三度と、手を振りながら上体を前後に折り曲げた。静かな活気をみなぎらせて、シュトロープはしばらく口笛を吹き、鼻歌を歌い始めると、次から次へと曲を変えていった。私は、その脈絡のない（シュトロープとしてはめったにないことだ）歌による真情吐露にじっと耳を傾けていた。突然私は、「アウワヴェルディ」(Allawerdy)の歌を耳にして度肝を抜かれた。私は、この歌を、まじめな詞とふざけた詞と、幾通りかの歌詞で知っていた。シュトロープはドイツ語の単語とロシア語の単語が混じりあった歌詞で歌ってい

た。「アウワヴェルディ」でなく、「アルラベルディ」(Allahberdy)と発音していた。「どこでその歌を覚えたのですか？」私は好奇心をそそられて尋ねた。

「将来のティフリスでの任務に備える一方で、カフカスの習慣、文化、経済、歴史を学ばねばなりませんでした。専門家たちはわれわれに、とりわけこんなことを言っていたのです。あそこの民族、種族は皆、昔から「アルラベルディ」の歌を、一種国歌のようなものとして受け入れていること、またカフカスの歴史の知識がないために——今ではカフカスの住民がきわめて高度な民族的誇りと自尊心を持っている事実をよく知らないでいる多くの人々の見解とは異なり、この歌をまじめに論ずべきであり、そしてこの歌を侮辱するような扱いは彼らは特に敏感だ、と言ったことです」

「どうしてあなたは、「berdy」と発音なさるのですか」「そう教わったのです」

このあとの議論の中で、私たちは、言語のなかには「B」が「W」の文字の代わりに用いられているものもあること、「Allah(神)」と「werdy」あるいは「berdy」の二要素からなる単語「Allawerdy」は、いろいろな風に発

音されていること、全体として「御成功を祈る」「お元気で」といった意味であり、もともとアルメニアの歌であったらしいこと（アルメニア領グルジアの近くにアウワヴェルディという土地がある）、またこの歌は、十九世紀半ば、カフカスの反乱者、とくにシャミル配下の反乱者たちによっておごそかに歌われたものであることを明らかにした。また、決してこのメロディーにいかがかわしい詞をつけて歌うべきでないこともはっきりさせた。「ではあなたは、よほどくわしくカフカスをお知りになったのですね」

「理論と——親衛隊ベルリン本部から届いた研究資料と一九四二年のカフカス山脈の峠への旅とからですよ。前に言いましたように、一九四一年十月二十日に、ハインリヒ・ヒムラーが、ティフリスの親衛隊兼警察指導者に即刻就任する準備をするように私に命令したのです」

「一九四一年十月にですと?! それでは一体、あなたがたのソ連領内の南部戦線は、その時どこにあったのですか」

「ロストフの前地ですよ。あそこはカフカスへの入口ですからね」

「私の記憶だと、ロストフが国防軍に制圧されたのはも

う少しあとだったと思いますがね。そのあとあなたがたは、ロストフを奪回されて、あの地域をめぐる長期戦が続いたはずですよ。攻撃が長びいて、たしかようやく一九四二年の中頃になってカフカスの北部に侵入したのでしたね。ヒムラーは、夢を現実ととり違えて、すでに一九四一年十月には、すぐにもティフリリスとバクラー、バツミに入れると確信していたのですね」

シントロープはこの話題を取り上げようとしなかった。

*

ある日、シントロープが、シールケに向かつて、戦争中、ウィーンで「警察本部」のひとつを率いたことがあると話した。不思議に思った私は、どういふことかと尋ねた。すると彼は、一九四二年末に、ヒムラーの命令で近い将来、ゲオルギエン（グルジアのこと）・ティフリリス活動区^{ベリヤヒ}の任務につく予定の親衛隊兼警察部隊をウィーンに組織したのだと説明した。この「本部」のメンバーは、グルジアに対して予想される行動の手順と諜報活動の資料を調査し、政治訓練、時には登山やスキートの訓練をオーストリアの山岳部で行なっていたのである（「山

岳部の村でいかに手入れを行なうか」等々）。

シントロープは、ほかの親衛隊、警察、国防軍部隊の同僚には秘密裡にこの準備活動を指揮していた。一九四一年十月からは、関連書類が彼のもとに届けられた。その後、カフカス制圧が遅れるにつれて、彼は、グルジア、アルメニア、ダゲスタン、アゼルバイジャン、オセチアに関する自分の情報を体系的に深め、ティフリリス「特務部隊」——ある時シールケが口にした言い方に従うならば「ティフリリスのできそこないの殺人部隊」——の幹部が、できるだけ立派な訓練を身につけられるように心を砕いた。

カフカスでの自分の行動計画についての報告の中で、シントロープは、とりわけ、次のことを話した。

「私にとつていちばん大切だったのは、ささやかな判型にできるだけ沢山の内容を盛るために、強くて薄い紙に小さな活字でプリントした、厳密に遵守すべき文書として極僅少数数発行されていた小さな本でした」

「何の本ですか」

「カフカスの共産党活動家と無党派知識人、科学者、教師、作家、ジャーナリスト、聖職者、官吏、それに農民、経済関係従事者の中の重要人物など、あらゆる名が

載っているリストです」

「住所も載っていたのですか」と私は口をはさんだが、まさか、ナチスがそこまで正確なデータをもっていると思っただけではない。

「もちろんです。電話も載っていました。さらに、当事者が身を隠した場合のために、家族と友人関係の住所も載っていました。さらにまた——個々人に関するデータと何枚かの写真もついていました。普通に印刷したなら、ぶ厚い本になっていたことでしょう」

シールケはあごひげをなで、落ち着きなくまばたきを繰り返していた。私も黙っていた。その、ナチスの「ポケット・ブック」がどんな目的で作成されたのか、もしシントロープがトビリシの任務についていたとすれば、そこに記載されていた何万人もの人々がどのような運命を辿ることになったか、私たちには分かっていたのである。

あるとき私は、シントロープに尋ねた。

「ウクライナのD-4アウトバーン建設に加わったのは、あなたをカフカスに入植させる計画の実施第一段階だったのですか。あなたはリーヴォフ・ロストフ・高カフカスの幹線道路を帝国の利益のためと将来自分がグルジ

アを支配するのを容易にするために建設したのですか」

彼は、そのとおりだと認めた。

*

ある日、自動車の話をしているとき（それはいつでも男性を夢中にさせる話題だ）、シントロープは、BMWの車の美点を列挙していった。

「バイエリッシュ・モトローレン・ヴェルケ（BMW）株式会社は、ミュンヘンで素晴らしい自動車を生産しています。それも安くはないものです。ハインリヒ・ヒムラーはこの車を——旅行用のと特別用のと——数台持っています。そしてね」とシントロープが急いで言った。「一九四二年に、カフカスのエルブルス地域の山岳戦線の最前線に出かけたとき、私は新品のBMWを割り当ててもらっています。スペースをゆつたりとった、悪条件の地形に合わせた車で、エンジンにはドラゴンみたくでした。

親衛隊帝国指導者と話し、最終命令を受けたあと、私はこの車でベルリンを出発しました。途中、クラクフ、リヴォフ、ヴィンニツァ、ロストフで親衛隊の上級指導者と何度も会談を行いました。さらに、「A」軍集団司令部では、ヴィルヘルム・リスト元帥のもとで面倒な